

日銀の黒田新体制がスタートして、今後の金融市場の動きに注目が集まっている。市場関係者の間ではいろいろな憶測が飛び交っているが、そうした中で興味深いものを2つほど取り上げてみたい。

1つは足下での長期金利の動きである。10年物物債の利回りで0・5%台という非常に低い金利となっている。大胆な金融緩和なので長期金利が下がるのは当然だと言つ人もいるが、話はそう簡単なことではない。もし金融緩和策が早い時期に物価を上昇させると市場が信じているのであれば、長期金利はその物価上昇を反映して上昇し始める

## 伊藤元重の

# ニュースな見方



と考えられるからだ。

もちろん実質金利(名目金利マイナス予想物価上昇率)が低下すると考えれば、期待物価上昇率ほどには長期金利は上がらないだろう。それでも、名目の物価

上昇率は、少しは上がるはずだ。そうしたことが起きていないのは、市場が物価はすぐには上がらないと見ている。為替の円高調整が進み、

一部は指摘する。そうかも知れない。そもそも黒田新体制になってから、まだ真

と考えられるからだ。体的に金融政策を変更して、もちろん実質金利(名目金利マイナス予想物価上昇率)が低下すると考えれば、期待物価上昇率ほどには長期金利は上がらないだろう。それでも、名目の物価上昇率は、少しは上がるはずだ。そうしたことが起きていないのは、市場が物価はすぐには上がらないと見ている。為替の円高調整が進み、一部は指摘する。そうかも知れない。そもそも黒田新体制になってから、まだ真

と考えられるからだ。体的に金融政策を変更して、もちろん実質金利(名目金利マイナス予想物価上昇率)が低下すると考えれば、期待物価上昇率ほどには長期金利は上がらないだろう。それでも、名目の物価

上昇率は、少しは上がるはずだ。そうしたことが起きていないのは、市場が物価はすぐには上がらないと見ている。為替の円高調整が進み、一部は指摘する。そうかも知れない。そもそも黒田新体制になってから、まだ真

と考えられるからだ。体的に金融政策を変更して、もちろん実質金利(名目金利マイナス予想物価上昇率)が低下すると考えれば、期待物価上昇率ほどには長期金利は上がらないだろう。それでも、名目の物価

上昇率は、少しは上がるはずだ。そうしたことが起きていないのは、市場が物価はすぐには上がらないと見ている。為替の円高調整が進み、一部は指摘する。そうかも知れない。そもそも黒田新体制になってから、まだ真

と考えられるからだ。体的に金融政策を変更して、もちろん実質金利(名目金利マイナス予想物価上昇率)が低下すると考えれば、期待物価上昇率ほどには長期金利は上がらないだろう。それでも、名目の物価

## 「物価上昇」飛び交う臆測

### 日銀新体制と金融市場

出口戦略を意識したもので、これが怖くて、白川体制では長期の国債を購入することに消極的であったという見方もある。

しかし、ものは考えようである。物価が上昇し始めても、日銀はなかなか国債を売り戻すことができない。これが長期国債を購入することの意味である。和が功を奏すれば、それだけ将来の物価上昇を確実なものにするというにもなる。物価

めても、日銀が急いで国債を売ってバランスシートを調整しようとするれば、国債金利の上昇という悪影響が入することは、あえて退路を断つという意味もあるのだ。

白川体制では量的緩和は期間の短い国債に集中していた。これは明らかに況が想定される。

とだ。白川体制では量的緩和は期間の短い国債に集中していた。これは明らかに況が想定される。

とだ。白川体制では量的緩和は期間の短い国債に集中していた。これは明らかに況が想定される。

\*この記事は日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。